岐阜県飛騨市宮川村における 民家のタテアゲ構法

A RESEARCH ON A CONSTRUCTION SYSTEM “TATEAGE” OF FOLK HOUSES IN MIYAGAWA VILLAGE HIDA DISTRICT OF GIFU PREFECTURE

青柳由佳 ——— * 1 安藤邦廣 ——— * 2

Yuka AOYAGI ——— * 1 Kunihiro ANDO ——— * 2

キーワード：
民家、タテアゲ、宮川村、架構、改築

Keywords:
Folk house, TATEAGE, MIYAGAWA village, Framework, Rebuilding

In Miyagawa Village, we can see many folk houses built by a construction system “TATEAGE”. We investigated “TATEAGE” how to construct. When rebuilding the folk houses from a thatched roofing to a single roofing, some existing wall posts were taken away and long new wall posts were set up. In most cases a space between beams grew larger. “TATEAGE” was constructed about 1900 ~ 1970.

1. はじめに

本研究は、岐阜県の北部で富山県の県境に位置する宮川村（図1）における民家の改築方法の詳細について報告するものである。この改築を村民はタテアゲ^{注1)}、タテアガルと呼ぶ。

宮川村は村の98%が山林であり、村の中央を宮川が流れ、川と並行して高山と富山を結ぶ越中西街道があり、街道沿いには現在26集落が点在する山間集落である。

宮川村の民家における既往の研究は、昭和11年に富田¹⁾が宮川流域の屋根の形状をスケッチにて報告したものが初出である。平成10年には山田²⁾らが宮川村の奥洞にある廃屋と洞から塩屋に移築保存されている旧中村家について調査し、廃屋が茅葺民家を改築した可能性が高いことに触れている。筆者ら³⁾は宮川村種蔵を対象に民家の変容過程について調査し、茅葺を改築したタテアゲについて触れたが、タテアゲ構法の詳細については明らかにされていない。

近隣地域の民家においては、神岡町、上宝村で近世民家の調査が伊藤ら⁴⁾においてなされている。

また近隣地域における民家の改築についての研究を見ると、堀江ら⁵⁾は石川県鹿西町にて明治以降における茅葺から瓦葺へ変わる時の小屋組の変化について明らかにしているが、「屋根替え」という言葉が表すように桁より上部の小屋組の変容である。玉生ら⁶⁾は石川県川北町において、上屋部分を支えている柱を残して茅葺民家を改築した事例を報告している。これは茅葺屋根の下屋部分に束立てして屋根を替えており、下屋部分を上屋に取込んだ改築事例である。

本研究はタテアゲという改築法を表す言葉が現在もなお残っている宮川村において、改築法の詳細について報告するものである。

2. 調査概要

宮川村に現存する343棟の民家を対象に、外観調査と聞き取り調査によりタテアゲと確認できた30棟を調査対象とする（表1^{注2)}）。外観調査は2011年8月17日～20日、詳細な実測調査は2012年10月22日～23日、悉皆調査、聞き取り調査及び実測調査は2013年8月26日～28日である。調査対象の一部はすでに報告している宮川村種蔵の民家を含んでいる³⁾。

3. タテアゲ構法

3.1 宮川村における茅葺民家の概要

飛騨国中案内⁷⁾（延享3年（1746年））によると、明治期以前は、宮川村全集落は茅葺の民家であった。

宮川村洞に明治33年頃に建てられ、現在は宮川村塩屋のみやがわ

図1 調査対象地

¹⁾ 名古屋女子大学家政学部 講師・博士（デザイン学）
〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40

²⁾ 筑波大学芸術専門学群 名誉教授・工博

¹⁾ Assistant Prof., Faculty of Human Life and Environmental Science, Nagoya Women's Univ., Dr. Design

²⁾ Emeritus Prof., Faculty of Art and Design, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

表1 調査対象民家一覧

NO	集落	建築年代	根拠	タテアゲ年代	タテアゲの類型			平面規模(芯々mm)	軒高mm 土台上～軒上	階数	間取り	詳細 実測	軸組			小屋組	屋根葺材の変容
					根拠	表側	裏側						桁行	× 梁間	ウシ		
1	打保	不明		明治40年	記録	通し柱	継ぎ柱	15,219 × 10,059	6,416	3	○	○	○	なし	ダシノボリ	—	茅→不明→トタン
2	塩屋	不明		明治末頃	証言	通し柱	置き柱	15,027 × 8,275	5,907	3	○	—	不明	○	ダシノボリ	—	茅→不明→トタン
3	塩屋	不明		大正3年以降	伝承	不明	不明	14,965 × 9,240	6,110	3	○	—	○	切断	ダシノボリ	—	茅→クレートタン
4	塩屋	不明		大正3年以降	証言	通し柱	通し柱	13,990 × 9,400	6,368	3	○	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→不明→焼き瓦
5	三川原	明治10年頃	伝承	大正14年	伝承	通し柱	通し柱	17,437 × 10,302	6,167	3	○	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→クレートタン
6	菅沼	明治28年	過去帳	大正未一～昭和初期	証言	継ぎ柱	継ぎ柱	15,925 × 10,920	6,174	3	○	○	○	なし	ダシノボリ	—	茅→クレートタン
7	種蔵	江戸	伝承	昭和1年頃	伝送	通し柱	置き柱	16,831 × 10,275	6,085	3	不仕	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→クレートタン
8	種蔵	大正以前	伝承	昭和2年頃	実見	通し柱	不明	12,850 × 8,407	5,376	2	不仕	○	不明	なし	ウチノボリ	ウデギ	茅→クレートタン
9	菅沼	約150年前	伝承	昭和4年以前	証言	置き柱	不明	14,877 × 10,102	6,156	3	○	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→クレ→瓦
10	種蔵	大正以前	伝承	昭和5年頃	実見	通し柱	置き柱	13,988 × 9,808	5,667	3	不仕	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→クレ→瓦
11	菅沼	不明		昭和5～6年頃	実見	通し柱	不明	13,324 × 10,308	5,358	2	不仕	—	不明	不明	不明	なし	茅→クレートタン
12	三川原	不明		昭和6年	証言	置き柱	置き柱	16,130 × 9,070	6,886	3	○	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→トントシ→トタン
13	菅沼	約150年前	伝承	昭和6年	証言	通し柱	不明	14,651 × 10,420	6,351	3	○	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→クレートタン
14	三川原	不明		昭和7年	証言	通し柱	不明	17,195 × 10,260	6,662	3	○	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→トントシ→トタン
15	野首	明治元年頃	証言	昭和8年頃	証言	通し柱	置き柱	16,693 × 10,371	6,349	3	○	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→クレートタン
16	中沢上	不明		昭和10年以前	証言	通し柱	不明	15,456 × 10,511	5,939	3	○	—	○	あり	ダシノボリ	—	茅→トントシ→瓦
17	塩屋	大正3年(洪水)以降	伝承	昭和12年	実見	通し柱	通し柱	11,524 × 9,357	6,177	3	○	—	○	不明	ダシノボリ	—	茅→トントシ→トタン
18	野首	不明		約70年前	証言	通し柱	置き柱	15,710 × 9,325	6,474	3	不仕	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→クレートタン
19	洞	不明		戦後	証言	通し柱	継ぎ柱	14,850 × 9,410	6,248	3	不仕	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→不明→トタン
20	種蔵	江戸	伝承	昭和23年	板図	通し柱	継ぎ柱	11,025 × 10,202	5,708	2	○	○	○	なし	ダシノボリ	—	茅→トントシ→瓦
21	三川原	明治	伝承	昭和25年	証言	通し柱	不明	12,958 × 10,982	6,077	3	○	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→セメント瓦
22	森安	約150年前	伝承	昭和25～26年頃(ダム工事後)	実見	通し柱	不明	14,210 × 10,660	6,060	3	○	—	○	不明	不明	ウデギ	茅→トタン
23	種蔵	江戸	伝承	昭和27年	墨書	通し柱	置き柱	13,865 × 9,485	6,158	3	○	○	○	切断	ダシノボリ	—	茅→トントシ→瓦
24	林	不明		昭和29年頃	証言	置き柱	不明	10,670 × 8,398	6,290	3	○	—	○	不明	不明	ウデギ	茅→トタン
25	三川原	約150年前	伝承	昭和37～38年	証言	置き柱	置き柱	14,767 × 9,216	6,218	2	○	—	○	不明	不明	ウデギ	茅→トタン→瓦
26	巢之谷	100年位前	伝承	昭和42年	実見	置き柱	置き柱	9,630 × 8,428	5,931	一部3	○	—	○	切断	ウチノボリ	ウデギ	茅→瓦
27	杉原	大火(大正14.15)以後	伝承	昭和42年	実見	置き柱	不明	14,059 × 7,280	5,293	2	○	○	△	なし	ウチノボリ	ウデギ	茅→瓦
28	杉原	大火以後	伝承	昭和42年	実見	置き柱	不明	14,702 × 7,270	5,582	2	—	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→瓦
29	杉原	大火以後	伝承	昭和45年以降	実見	置き柱	不明	8,580 × 7,175	6,013	2	—	—	不明	不明	不明	ウデギ	茅→トタン
30	打保	不明		不明		通し柱	通し柱	15,671 × 8,944	6,404	3	○	—	不明	不明	ダシノボリ	—	茅→不明→瓦

凡 例 【実見】:「子供の頃に見た」「～頃に見た」「自分で建てた」など建設現場を見たもの
【証言】:「と思う」「頃ではないか」など曖昧な表現を含むもの
【伝承】:「～さんが言っていた」「～と聞いている」など言い伝えられたもの

タテアゲの類型: 通し柱型
 継ぎ柱型
 置き柱型

△: 天井に隠れて見ることができないが間取りや状況によりあると考えられるもの

民族資料館に移築保存されている旧中村家(写真1)は入母屋の茅葺であり、明治期の建築形式を示すものである。旧中村家を見ると広間(オオマエ)の中央上部の桁方向にウシ梁が上大黒と下大黒柱に指してあり、チョンナ梁がウシ梁と下屋桁に架けられる(図2)。ウシ梁は富山県砺波地方の民家で特に力のかかる大梁を指す呼称⁸⁾であり、村民はウシと呼ぶ。チョンナ梁は雪の荷重による根曲り材で、間取りによると梁間の大きな家で使うと丈夫になるという。村民はチョンナと呼ぶ。広間周り及び外周にはヒラモン(差鴨居)が廻っており軸部を固めている。ヒラモンに床梁を架けた階をニカイと呼んでおり(写真2)小屋裏階をツシと呼んでいる。ツシは桁方向の7対の枚首^{注3)}と妻方向の3対の枚首に囲まれた小屋裏空間である(写真3)。

3.2 タテアゲ構法の概要とその類型

間取りによると、タテアゲとは茅と枚首を取除き、既存の下屋柱を取除いて新たな通し柱を建てるもしくは下屋柱を残したままその上部に柱を継ぎ足し、軒高を高くして小屋組みを再構築するものである(図3)。これにより下屋部分が上屋に取込まれ梁間が拡大する民家がある。家を建てることはタテマエと呼び、タテアゲとは区別して呼ばれている。タテアゲは、明治末頃から昭和45年頃まで行われている。

タテアゲを梁間の拡大と下屋柱の改築の仕方により3つに分類する。下屋部分に新たに通し柱を建てる「通し柱型」と、既存の下屋柱を利用して新たに柱を継ぐ「継ぎ柱型」と、既存の下屋柱を残したまま上屋梁(桁)の上に柱を置く「置き柱型」の3つである(図3)。

図2 旧中村家平面図・断面図

図3 タテアゲ構法の概要とその類型

これらの類型は、民家の表側と裏側^{注4)}で異なって使われている場合が多い。民家の裏側はトタンでおおわれている場合が多いため外観からは判断が難しいが、表側に通し柱が使われることが多い(図4)。これは聞取りからも見た目を意識したものと考えられる。

3.3 ツシの利用と小屋裏の拡大及びタテアゲ年代と類型

宮川村では明治期において、副業であった養蚕に必要な空間、多雪地域のための冬季の作業場、山間集落による狭隘な土地利用のため納屋の代わりとなる収蔵空間としてツシ(小屋裏)は利用されていた。

大正中期頃より養蚕に加え、作馬^{注5)}が盛んとなり、ニカイ又はツシでは6月から9月中旬まで養蚕が行われ、ツシは10月から4月まで馬の飼料と敷草置場、作業場として利用された。この時期は養蚕と作馬は産業として最盛の時期であり、蚕室の拡大と飼料及び敷草置場の拡大要求が高まり、そのことがツシ拡大の要因と考えられ、タテアゲは屋根材の葺替えを行うと共にツシ空間の拡大要求を改築によって実現したものと考えられる。この時期のタテアゲの類型は、ツシ空間(小屋裏)の拡大に伴う「通し柱型」と「継ぎ柱型」が多い。また小屋裏の使用を考慮し、軒高が高いものが多い(図5・6)。

戦後には、養蚕と作馬の規模が縮小したがタテアゲが行われている。戦後のタテアゲは、蚕室としての要求は減り、飼料と敷草置場、作業場の確保と共に居室を二階に設けたいという要求によるものと考えられる。また昭和40年前後には小屋裏を作業場や収蔵空間として利用することはなくなった。この頃行われたタテアゲは、小屋裏が天井裏となり、二階を居室として利用している。タテアゲの類型

は表側に「置き柱型」を用いることが多くなり、梁間の拡大も少なく小屋裏の利用もないため軒高も抑えられていた(図5・6)。この頃のタテアゲを村民は「二階だけ(のみ)のタテアゲ」と呼んでいる。これは、小屋裏を利用するためにツシ階へ柱を伸ばして軒高を増すそれ以前のタテアゲと区別した呼び方であると考えられる。

3.4 タテアゲ構法の実例

タテアゲ年代が古い民家NO.1、タテアゲ年代が新しく「二階だけのタテアゲ」と呼ばれる民家NO.27、タテアゲ年代では中間期にあたり特徴的なチョンナ梁をもつ民家NO.23、また裏側の継ぎ柱部分の仕口が目視で確認できるNO.20を例とし、詳細について報告する。

NO.1 明治40年のタテアゲ(表側:通し柱型、裏側:継ぎ柱型)

明治40年にタテアゲされた民家で、調査対象民家の中でタテアゲ年代が明らかな最も早い時期の民家である(図7・写真4.5)。表側は通し柱型であり、新設の通し柱と既存柱は、差鴨居の高さと既存の上屋梁高さと繋いでいる。差鴨居高さの仕口は不明であるが(写真6)、既存の上屋梁高さは新設の梁を既存の梁に蟻落としにて繋いでいた(図7詳細図・写真7)。裏側は継ぎ柱型で、継手は不明であるが、補助的にボルトを使っている(図7詳細図・写真8)。

NO.20 昭和23年のタテアゲ^{注6)}(表側:通し柱型、裏側:継ぎ柱型)

昭和23年にタテアゲされた民家で、表側は通し柱型、裏側は継ぎ柱型である(図8・写真9)。裏側の隅柱の継手はボルトで縫った金輪継ぎである(図8詳細図・写真10)。管柱は継手の詳細が目視により確認できないが、ボルトと金輪継ぎと思われる一部が見えることから隅柱同様にボルトで縫った金輪継ぎと考えられる(写真11)。

NO.23 昭和27年のタテアゲ^{注7)}(表側:通し柱型、裏側:置き柱型)

昭和27年にタテアゲされた民家で表側は通し柱型であり、裏側は置き柱型である(図9・写真12)。この民家は改築する際に妻側東部を小さくしたため東部にも通し柱が用いられている(図9軸組図)。またもともとチョンナ梁があり、タテアゲをする際ニカイを廊下として使用するために、チョンナ梁の先端の曲がった部分が妨げとなって切断し、残ったチョンナ梁が下がらないように既存の梁にボルトにて吊られている(図9詳細図・写真13)。

NO.27 昭和42年のタテアゲ(表側:置き柱型、裏側:不明)

昭和42年にタテアゲされており、調査対象民家の中でタテアゲ年代が新しいもののひとつである(図10・写真14)。表側は置き柱型である。裏側は目視での確認はできないが、柱の配置状況から下屋柱が残っており継ぎ柱型と考えられる。屋根を茅葺から瓦に葺きかえる際、二階を居室として利用できるように改築している。小屋裏

図5 タテアゲ年代とタテアゲの類型と梁間・軒高の関係

図6 タテアゲ構法の類型による小屋裏の拡大とタテアゲ年代

写真4 NO.1 外観

写真5 NO.1 ツシ階

() 内は戦後頃の部屋名
○ 茅葺当時の上屋柱位置
□ 茅葺当時の下屋柱位置

----- 茅葺時の扱首位置を示す

表側：繋ぎ部分詳細図

写真7 表側：繋ぎ部分 蟻落とし

裏側：継ぎ柱部分詳細図

写真8 裏側：継ぎ部分

写真6 表側：差鴨居レベル繋ぎ部分

図7 NO.1 平面図・断面図・軸組図・詳細図
(明治40年タテアゲ)
表側：通し柱型 裏側：継ぎ柱型

写真 9 NO. 20 外観

写真 12 NO. 23 外観

写真 14 NO. 27 外観

写真 10 裏側：隅柱継ぎ部分

写真 11 裏側：管柱継ぎ部分

図 8 NO. 20 断面図・詳細図
(昭和 23 年タテアゲ)
表側：通し柱型 裏側：継ぎ柱型

写真 13 表側：チョンナ梁切断部 (ニカイ)

図 9 NO. 23 断面図・軸組図・詳細図
(昭和 27 年タテアゲ)
表側：通し柱型 裏側：置き柱型

図 10 NO. 27 平面図・断面図・軸組図
(昭和 42 年タテアゲ)
表側：置き柱型 裏側：不明

は二階の天井裏となり小屋裏の使用もなくなり、タテアゲ後の軒高も低い。住民は「ニカイだけのタテアゲ」と呼んでいた。

3.5 屋根構法

小屋組部分は桷首を取除き、新たに小屋組みを構築する。既存梁の上2か所に2～3本の柱^{注8)}を建てナカシメバ리를架け、そのようにして架けた2か所のナカシメバリの上に桁方向にテンウシとヤスメを架けている(図7軸組図)。ノボリキはテンウシとヤスメにのせられる。雪が多い地域であり軒を深くする必要がある。ノボリキは桁から出すダシノボリ(図11)と桁で止まるウチノボリがあり、ウチノボリの場合は柱にウデギを付けウデギゲタを架けて桁から出る垂木を支えている(図11)。ダシノボリ及びウチノボリとウデギの選択は集落による違いが見られた(表1小屋組)。ダシノボリは長い材が多く必要であるため塩屋、洞、打保、菅沼など宮川村の中でも山間部でより材が得やすい集落で使われていたと考えられる。

葺材は茅葺から樽葺^{注9)}、トントン葺^{注10)}、トタン葺、瓦葺へと変わっており(表1屋根葺材の変容)、明治や大正の頃にタテアゲされた民家は樽葺、戦後にはトントン葺が見られ、昭和30年代頃からトタンや瓦に変わった。

図11 ダシノボリとウチノボリ・ウデギ

4. まとめ

タテアゲは、屋根の茅と桷首を取除き既存の下屋柱を取除いて新たな柱を建てるもしくは下屋柱に新たな柱を継ぎ足して軒高を高くし小屋組を再構築する。この際、梁間の拡大が起こる場合があり小屋裏空間が拡大した。タテアゲは、梁間の拡大と下屋柱の改築方法により、下屋柱を取除いて通し柱を建てる「通し柱型」、下屋柱の上に新たな柱を継ぐ「継ぎ柱型」、下屋柱を残し上屋桁の上に新たな柱を置く「置き柱型」の3つに類型化された。小屋裏の拡大の要因はこの村の生業である作馬や養蚕による小屋裏空間利用の増大に関わる。タテアゲの類型と小屋裏空間の拡大、年代との関係より以下が明らかとなった。

①通し柱型、継ぎ柱型は梁間が拡大し、小屋裏空間が拡大する。通し柱型は表側に用いられることが多く、これは見た目を意識したものと考えられる。通し柱型の既存柱と新設通し柱は差鴨居高さで既存の上屋梁高さで繋いでおり、既存の上屋梁高さは新設の梁を既存梁の上に蟻落としにて繋ぐ事例が見られた。また継ぎ柱型の柱と柱の継手は、ボルトで縫った金輪継ぎの事例が見られた。これらの類型は明治末期から戦後にかけて多く使われ、生業である養蚕や作馬が盛んとなる時期と重なる。この時期のタテアゲは、屋根の葺替えと同時に、蚕室や敷草置場、作業空間となる小屋裏空間の拡大を実現したものと考えられる。

②置き柱型は梁間が維持されるため梁間の拡大がなく小屋裏空間

の拡大もない。昭和30年代頃からは表側にこの類型が用いられる場合が多くなる。昭和40年前後においては、養蚕や作馬もなくなり小屋裏空間を作業場や収納空間としての利用の必要もなく、屋根葺材を茅からトタンや瓦へ葺替える際、二階を居室として改築した。この時二階の天井は張られ小屋裏は天井裏となった。住民はこれを「ニカイだけのタテアゲ」と呼ぶ。これは、タテアゲ時に小屋裏空間を利用するためにツシ階へ柱を伸ばすそれ以前のものと区別した呼び方であると考えられる。

タテアゲは明治末期から昭和40年代まで行われた。明治末期から戦後までのタテアゲと昭和40年前後のタテアゲでは小屋裏利用の有無のために、必要な空間の実現に対して改築法にも違いが見られた。

近隣地域の民家との関係及びその位置づけは今後の課題とする。

謝辞

調査にご協力頂いた民家所有の皆様へ深く感謝申し上げます。

注

注1) 本稿におけるカタカナ表記については、村民と大工による聞き取り調査で明らかとなった宮川村での呼称である。漢字表記は一般名称である。

注2) 表1は、タテアゲ年代の早い時期の民家より順に並べた。

注3) 村民は桷首をガッシュと呼ぶ。

注4) 民家の表側とは桁行方向の入口のある側であり、裏側はその反対である。

注5) 作馬(サクンマ)とは富山平野の農家に4月の初めから6月頃まで田仕事に馬を貸し、その貸付料として1頭につき米約5俵を受取ることである。明治10年頃富山に近い杉原で始まり、明治20年より盛んとなり、大正時代に全盛期を迎える。戦時中は軍馬として徴収され、戦後に再び飼う家も出ると昭和30年頃、耕運機の普及と共になくなる。

注6) 参考文献3)のNO.④民家

注7) 参考文献3)のNO.⑤民家

注8) 小屋組として屋根を支える部材としては束と言いつた方が一般的であるが、この部材は長さ約1800mmと長いのでここでは柱と言いつた。

注9) 樽葺とは栗の板材で葺いた屋根。村民はクレとよぶ。樽板は長さ約450-650mm幅約100-125mm厚さ約6-8mm。板が風で飛ばないように石を置いた。

注10) トントン葺きとは栗や雑木で葺いた屋根。村民はトントンと呼ぶ。板材は樽板より小さく、長さ約450mm幅約80mm厚さ約4mm。釘にて固定された。

参考文献

- 1) 富田令禾：宮川流域の茅葺民家、飛騨考古土俗学会 ひだびと、昭和11年度第11号、pp21-23、1936.11
- 2) 山田昌久他：飛騨山峡の人類史、東京都立大学考古学報告、1997-2003
- 3) 青柳由佳、小林久高、濱定史、豊川尚、安藤邦廣：岐阜県飛騨市種蔵集落における3層民家の変容過程とその要因、日本建築学会計画系論文集、第666号、pp1389-1396、2011.08
- 4) 伊藤鄭爾、関口欣也：岐阜県神岡町・上宝村の近世民家、日本建築学会論文報告集、第78号、pp31-36、1962.10
- 5) 堀江亨、茶谷正洋、八木幸二：「さしものづくり」における軸組と小屋組の関係の変化過程 石川県鹿西町周辺の木造住宅における架構法の継承に関する研究 その4、日本建築学会計画系論文報告集、第452号、pp95-103、1993.10
- 6) 玉生雅之、土屋敦夫、野上恒：石川県川北町の農家の調査研究、日本建築学会北陸支部研究報告集、第37号、pp439-442、1994.7
- 7) 上村木曾右衛門：飛騨國中案内、かすみ文庫、1987.5.20
- 8) 日本建築学会民家語彙収録部会：日本民家語彙集解、日本アソシエーツ株式会社、1985.10.9
- 9) 継手・仕口-日本建築の隠された知恵、INAX出版、1984.11.5
- 10) 宮川村村誌編集委員会：宮川村誌、1981.11.20

[2014年2月19日原稿受理 2014年5月16日採用決定]